「神にのみ仕える」

ルカによる福音書４章１－１３節

森島　牧人　牧師

教会の暦では２月２２日（灰の水曜日）から受難節に入り、今日は受難節第２主日となります。今日の聖書は、「さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして荒れ野の中を《霊》によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食べず、その期間が終ると空腹を覚えられた。」（ルカ４：１－２）と始まっています。またこの記事の直前、主イエスがヨルダン川でヨハネからバプテスマをお受けになったと聖書は記しています。神の子が何故と疑問を覚えますが、まず主イエスは私たちに＜バプテスマ＞を与えてくださったのです。また、大抵は苦難や試練の象徴として度々聖書に出て来る 40 という数字が、ここでも使われています。

さて、今日の御言葉の中に出て来る《霊》はもちろん聖霊・神の霊のことです。主イエスは宣教に出る前に、悪魔の誘惑を受けるため、＜神によって＞荒れ野に導かれたということです。人間には普通のことであっても、神の子が誘惑を受けるとはどういうことかと思いますが、ここで言う誘惑とは、悪の道に誘い込むというよりは神に従う道から外れさせるといった意味合いです。本当は真っ直ぐ的を射なければならないのに弓が的を外れてしまう、つまり神の道から外れる、これが罪だと聖書は言っています。つまり人間を神から引き離そうとする力の根源が罪であり、それを人格化したのが悪魔です。神の御言葉に真剣に従おうとする時、突然ぐっと頭を上げて信仰を挫こうとするこの悪魔は、私たちにも憶えのある存在でしょう。

この時の悪魔は空腹の主イエスに「石をパンに変えるように」と囁きますが、主イエスの答えは「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある。」（同４：４）でした。これは申命記８：３を引用されたもので、人を真に生かす命はパンからではなく、神から来ると主イエスは考えたのです。続いて、悪魔は「わたしにひれ伏すなら、一切のものを与えよう」と誘惑しますが、主は申命記６：１３「あなたの神、主を畏れ、主にのみ仕え・・・」を引用し、これを退けられたのでした。

二つの誘惑をみ言葉で退けられてしまった悪魔は、主イエスをエルサレムに連れて行き、聖書の詩篇９１：１１「主はあなたのために、御使いに命じて・・・」を持ち出し、神殿の屋根から飛び降りるよう迫ります。主はこれに対しても「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」と申命記６：１６を引用した言葉で退けられたのでした。

神を試すというのは、自分の作った神の概念に神が合っているかどうか見ようとするものです。この時の悪魔の、神殿の上から身を投げて助かるのは神の子だという神への信頼と見える言葉も、実は神への不信の表現であることを主イエスは見破っておられたのでした。

今日の場面を読んでいると、荒れ野とは霊の導きと悪魔の誘惑が対決する場所であると思わされます。眼前に広がるのは信仰も枯渇するような殺伐たる荒れ野での霊と悪魔の対峙とは、まさに日常生活で私たちが体験していることです。しかしその荒野の真っ只中に主が立っておられて、私たちに道を示してくださる・・・それが今日の GOOD NEWS であり、テーマです。

この荒れ野の記事は、ルカ福音書だけではなくマタイ・マルコ福音書にも入っています。私が興味を持つのは、マタイが「聖なる都」と言っているところをルカは「エルサレム」と言い切り、さらにマタイやマルコの記述の順番を変え、エルサレムの神殿での誘惑をこの出来事の最後にしているところです。そのことからルカ福音書は、主イエスの宣教の生涯が始まる前の誘惑の物語の中で、エルサレムでの主の受難と復活をすでに予告していたのではないかと思われるのです。４：１３に「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまで主イエスを離れた。」とあります。その「時」とは主の地上の御生涯の最後である十字架上です。主が宣教に立たれる直前の悪魔からの誘惑の言葉は、やがて主が十字架上の苦しみの中で受けられる誘惑の言葉と同じものだからです。つまり今日の主と悪魔との戦いは、主の宣教活動直前の出来事というより、十字架上の死に至るまでの主の全御生涯の縮図であったと思えて来るのです。

私たちの人生も時として荒れ野の様相を呈し、信仰が枯渇するような場面を迎えます。そのような中で私たちは、神との繋がり、また人との生き方を問われることとなります。これは決して受難節だけのテーマではありません。しかし主の苦難を思って過ごす受難節の中でこそ、私たちはそのことを意識させられることになります。その意味で、受難節は神に対して悔い改めをする大きなチャンスを私たちにもたらしてくれると、私は思うのです。　　（説教要約　羽入田悦子）